

学位審査報告書

(ふりがな)	チョウ レイ
氏 名	張 黎
学 位 (専 攻 分 野)	博士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	人博 第 439 号
学 位 授 与 の 日 付	平成21年3月23日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当
研 究 科 ・ 専 攻	人間・環境学研究科 共生文明学専攻
(学位論文題目)	
『遊仙窟』語彙と和訓についての研究 －複音節語を中心に－	
論 文 調 査 委 員	主査 教授 内田 賢徳 副査 准教授 島崎 健 副査 准教授 道坂 昭廣 副査 准教授 須田 千里

(論文内容の要旨)

本学位申請論文は、中国唐代の伝奇小説『遊仙窟』の語彙と和訓を複音節語の視点から考察したものである。

第一章「序論」は、研究対象についての概略と、本論文における研究目的を述べた。

『遊仙窟』は唐代の作品(七世紀末成立か)で、張鷟(字は文成)の作である。小説の主人公が河源に使者として赴いた時に桃源郷的な積石山の神仙の窟を訪れ、五嫂・十娘という美しい姉妹に出会い、歓待を受け、宴席で詩の贈答を繰り返し、その夜十娘と結ばれ、翌朝涙ながらに別れるという内容である。

本書は、中国では早く散逸し、日本にのみ伝存されている。また日本に伝えられた最初の中国小説である。全体は 8,500 字にも満たない小編だが、『遊仙窟』の日本文学への影響は深くかつ長い。『万葉集』をはじめとして、平安時代以降の文学に多大な影響を及ぼしたことについては、多数の先行研究によって明らかにされている。

一方、日本における『遊仙窟』は漢文訓読資料でもある。漢文訓読は、一種の翻訳で、漢文を理解するための補助手段としての逐語的翻訳であり、一般的にあまり表現上の効果は必要ではないという質を持っていると理解されている。『遊仙窟』には、訓読の面ではほかの漢籍資料と違い、多くの和語らしい表現を使うという特徴が見られる。『遊仙窟』が訓読にあたってどのように扱われたのか、研究の課題は大きくはそこにある。その一環として、『遊仙窟』に多く含まれる唐代口語がどのように訓読されたかを、本論文は主たる対象とする。『遊仙窟』の中国中世の口語資料としての価値は、中国では魯迅の評価以来定着している。

本論文が複音節語を中心に考察を進めていく理由は、『遊仙窟』の全編にわたる異なり語数の 90% 以上は複音節語であるという点である。そして、中国語において、後漢以降の複音節語は、口語表現の基礎的な単位となっていたと言われる。即ち、複音節語の該当箇所を考察することができれば、『遊仙窟』の口語資料としての語彙と和訓の全貌をほぼはっきりさせることができると考えられる。

第二章は「本論」として、次の各節をもうけて、『遊仙窟』の、主として口語語彙がどのように訓読されたかを和訓に即して考察した。

第一節「『遊仙窟』和訓の特徴」では、疊語という複音節語の最も単純な形式の分析を通して、訓読資料としての『遊仙窟』の和訓の特徴を見出だそうとした。異なり語数 35 例の疊語形の和訓を考察した結果、疊語形の和訓中、文脈上日本語として要求されるのが疊語である場合と、本文を読み取る表現上の工夫として配される、従って造語的とも判断される例も含まれる場合との二種類が見出された。

第二節「『遊仙窟』の疊語語彙と和訓」は、『遊仙窟』の本文に多数存す

る疊語語彙とその和訓を中心に検討した。異なり語数 34 例の疊語漢語に附した和訓は二種類の形態を呈している。一つは和訓も疊語形態で対応している場合であり、9 例見られる。もう一つは文選読みを伴う非疊語和訓であり、25 例見られる。疊語の漢語に疊語の和訓を付けたことは加点者の漢語に対する理解の確かさを示し、意味から形態まで細かく、分析的に訓読する、漢文への高い理解力を示していると考えられる。一方、文選読みされた漢語は二つの様態を示している。一つは擬態語であり、もう一つは口語である。この二種類の場合、当該漢語に当てる適切な疊語形和訓が見つからない結果、文選読みによって、一度音読みして、更に和語で訓を付ける形態が必要になったと考える。

第三節「『遊仙窟』の口語語彙と和訓」では、口語語彙を中心に考察した。8,500 字未満の『遊仙窟』中、中国唐代口語と見られる複音節語は異なり事例で 100 語以上見られる。そのデータに基づいて、品詞別に分析を行った。その結果、品詞によって、その和訓の正しさの割合に差があることが分かった。即ち、具体的な概念を表す名詞・動詞・形容詞の訓読は、熟合され、一語として適確に訓む用例が多く見られるのに対して、副詞の場合は二字一語と認識せず、それぞれの漢字の字面で訓んだ用例が多く見られる。また、本文の口語語彙も品詞によって、違う特徴を表している。名詞の口語には、接辞が付加されるものが多い。動詞には、助動詞の付加と同義(類義)結合のものが多い。形容詞には重複(疊語)形が多く見られる。副詞には接尾語の付加と重複の語が共に見られる。

第四節「『万葉集』の『遊仙窟』と一致する口語語彙」では、口語語彙の視点から、『万葉集』中にある『遊仙窟』と一致する口語語彙を考察し、両者の相関性を考えた。『万葉集』の歌や文章に『遊仙窟』の影は色濃いものがあるにも拘わらず、『万葉集』における漢語口語語彙の使用は、『遊仙窟』に直接した応用と判断しがたい。また、『万葉集』において口語語彙を翻訳することから、義訓という方法を通して日本語に新しい表現と用法を生む契機をもたらすことも見出せた。

本論文は、以上の各考察を通して、複音節語の視点を中心に、古代日本が『遊仙窟』を受容した際に、当時の口語を含め、ほぼ正確な理解をもって訓読していたことを明らかにした。

(審査結果の要旨)

本学位申請論文は、中国唐代の伝奇小説『遊仙窟』の本文語彙が、日本においてどのように訓読されたかを、主として中国中世の口語を対象として考察したものである。

まず対象とするのは、単一の要素を重複させる疊語語彙である。疊語という語構成は、日中両語に共に存するが、それぞれ固有に成立した語構成であるため、単純に対応するわけではない。しかし、漢文訓読という場では、対応した形で訓をつけることが予想される。その関係を、日本語の側からと中国語の側から検討する（第二章第一、二節）。これは、全体から見て、口語語彙の和訓という主論に対して導入となっている。まとめて言えば、疊語相互の対応する類を中心に、和訓の方に、本文の中国語表現のニュアンスを掬い取るための表現上の工夫が、文選読みなど種々見られ、疊語に読むのもその一つとなる。

そこに見られる訓むことの意匠は、『遊仙窟』の口語語彙の訓読に当たっても見られる。本論文の主要部分をなす第二章第三節「『遊仙窟』の口語語彙と和訓」は、その考察に当てられる。

中国語において、唐代を中心に見られ、かつての使用とは異なる語の使用を、かつての用法、文言と区別して口語（俗語、白話とも）と称している。その現れは、古くは後漢にも溯るとも言われるが、ほぼ六朝期から唐代にかけての現象と見られている。日本にのみ伝存した『遊仙窟』がその内容において中国唐代の風俗を窺わせ、その言語表現において当時の口語表現を多く含むものであることは、魯迅の研究以来中国でも注目されるところで、近時『遊仙窟』の口語語彙研究が展開してきている。本論文は、それらに立脚している。また、日本では1930年代の神田喜一郎論文以来、『遊仙窟』の口語語彙が訓読においてどのように扱われてきたかが、個別例の訓詁を通して説かれてきた。本論文は、それらを踏まえ、全体で口語表現と目されるすべての例について、本文中国語と訓読日本語それぞれの語誌を十分に調査した上で比較、検討した。その結果、概念性の強い語、つまり名詞や動詞・形容詞では正確に訓読されている場合が多いが、副詞の場合、本文の二字で一語をなす複音節語においては、一字一字を逐語的に訓む例が目立つとする。

『遊仙窟』の和訓は、総じて訓詁に則して正確に訓読しているものが多いが、中には誤りもある。「交」は、口語で「教」と同じく使役に用いるが、『遊仙窟』中での訓は「コモゴモ」であり、誤っている。訓の正確さは多く古くつけられた注に従うことで得られていると判断される。有注本が、『遊仙窟』訓読史上いつ成立したかは詳らかでないが、12世紀の古辞書『類聚名義抄』図書寮本所載の『遊仙窟』訓には、注の部分のものが見られるから、その時代にはすでに成立していたと言える。従って現存の古

写本に残る古訓も、有注本の注に基づく判断される。訓の正確さは、それによるところが大きい。注は多く名詞や動詞につけられる。正確さの品詞別の偏差はそこに理由をもつと考えられる。本論文のこの論述内容とそうした資料のあり方とは整合的であり、『遊仙窟』本文の口語語彙と和訓との相関関係を考察するという視点の確かさを語る。この結論に至るための個々の事例の、訓詁と称する検討は、多くの困難を抱える。まず、中国語の口語という概念には、それほど確固とした規定があるわけではない。従ってその認定ということをもつた果たさねばならない。単に先行研究が認定した語をあげるだけではなく、文言と比した上での追認という過程を経なければならないが、今日の電子検索の便を得てもなお、困難な問題がある。かつそれを訓読する日本語についても、平安時代から鎌倉時代にかけての古語に精通する必要がある。本論文が、個々の訓詁において、それらの条件に対して不十分な部分を含むことは否めない。しかし、それを控除してもなお、本論文の得た結論は、『遊仙窟』訓読研究史に新しい一頁を開くものと判断される。

第四節『万葉集』の『遊仙窟』と一致する口語語彙は、『万葉集』中の中国中世口語語彙を取り込んだ表現と『遊仙窟』との関係を探る。『万葉集』は『遊仙窟』の書名をあげた引用をもつ最古の文献として知られ、八世紀の成立という時代性が、『遊仙窟』の成立年代を決める有力な傍証となる日本古代の歌集である。その歌の表現方法が『遊仙窟』の影響を多く受けていることは、元禄期に著された契沖の『万葉代匠記』以来の定説であるが、表現個々の語性に論及してその影響関係を説くことは、たかだか20年の研究史があるに過ぎず、また稀であった。本論文が中国中世口語という語性において検討を試みることは、その点で斬新である。検討の結果がむしろ交渉の直接性に否定的であることは、両書の関係からは意外でもある。しかし、『万葉集』の口語を利用した表現は『遊仙窟』将来以前から見られ、そのことは、本論文が指摘するように、中国中世の口語表現が、当時の、言うところの万葉びとにとって、同時代の中国語として当たり前の、現代語であったことを物語る。これは新しい知見である。

以上のように、本論文は、諸文明の共生と交渉を探求する人間・環境学研究科共生文明学専攻の理念に則る内容と判断される。

よって、本論文は、博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認定する。また、平成21年1月15日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。